

「戦略物資の未来地図」刊行に寄せて

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

6月8日、筆者の著作、「戦略物資の未来地図」が、株式会社あさ出版から発行された。本書は、石油・石炭・天然ガス・再生可能エネルギー・クリティカルミネラル・原子力・水素／アンモニアを「戦略物資」として取り上げ、米中対立や西側と中口の対立などに象徴される世界の分断を前提として、エネルギー安全保障や脱炭素化の観点から、戦略物資を巡る地政学を俯瞰的に考察する著作となっている。ここで「俯瞰的に考察する」と述べた点と密接に関係するが、本書は戦略物資の問題について、個別の物資の詳細な市場・需給分析や技術的な論考を行う「専門書」ではない。本書は、専門家や関連する具体的事業に関わる方々というよりは、本書が扱う非常に広がりのある大きなテーマに関心を持って下さる可能性がある、より一般的な読者に対して、戦略物資の未来を全体観として提示するための視座・視点の提供を、可能な限り平易な表現と図表・地図などの活用を通して、試みたものであり、基礎・入門的な位置づけの書物となっているといえる。

筆者は、昨年6月23日に「激震走る国際エネルギー情勢」（エネルギーフォーラム社）を、同年8月12日に「エネルギーの地政学」（朝日新聞出版社）を発行した。各々、分析・論考の切り口を変えながらも、最近、とりわけ2020年以降の国際エネルギー情勢の激動を強く意識し、エネルギー安全保障や脱炭素化の問題を地政学の観点から分析したものである。今回の著作、「戦略物資の未来地図」でも、今日の国際エネルギー情勢の重要課題を題材とする以上、前々著・前著と問題意識や論考において「一定の重なり」が生ずるところがあることは、著者として十分に意識・認識しているところである。しかし、筆者から見て、本書の特徴は、「世界の分断」の深刻化を今まで以上に強く意識し、その中で戦略物資がどのような位置づけを有することになるのか、その過程において、米国・中国・ロシア・EU・中東・グローバルサウスなどの主要な地政学のアクターが戦略物資にどのような働きかけをするのか、逆に戦略物資の未来が、上述のアクターのパワーバランスにどのような影響を与えるのか、という視点を明確に打ち出そうとしたことであると感じている。

また、上述の視点を基にした論考に関して、伝統的なエネルギー地政学分析の対象である、石油・天然ガス・石炭などの化石燃料だけでなく、再生可能エネルギー・原子力・水素／アンモニア、さらにはクリティカルミネラルを対象に加えた点も本書の特徴である。戦略「物資」の概念に戦略的な重要技術も一部包含される形になっている、と見てもよい。なお、小論「国際エネルギー情勢を見る目」の前号（639号）に記した、G7広島サミットの特徴と成果を振り返ってみると、本書の問題意識や論考との対比で、多くの点で腑に落ちる点や納得感があると筆者には強く感じられるところがある。そうした意味での今日性やタイムリー性も本書の一つの重要な特徴であると筆者は感じている。

本書では、戦略物資であるエネルギー・資源は、日常の市民生活や経済・産業活動を円滑に運営していくために必要不可欠なものであるため、時として国家が当該物資の需給環境や価格動向を睨みながら、戦略的な判断で需給バランスやサプライチェーンに影響を及ぼし、自国の国益最大化を図り、国家間パワーバランスを左右するもの、としている。その戦略物資について、本書では、ウクライナ危機など「今ある問題」の重要性を認識しつつも、過度にその点にだけ視線を当てるのではなく、視線を未来に向けた検討を重視する内

容となっている。本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 激動の時代の中で世界が戦略物資に向ける眼差し
- 第2章 資源を豊富に持つのはどの国なのか：戦略物資の最新地図
- 第3章 国家の命運を左右する世界の分断と戦略物資
- 第4章 政治化する気候変動問題：脱炭素化から見た戦略物資
- 第5章 日本の戦略物資とその未来地図

第1章では、本書での戦略物資を定義し、論考の対象を石油・石炭・天然ガス・再生可能エネルギー・クリティカルミネラル・原子力・水素／アンモニアとすることを提示する。また、戦略物資としての石油などの例を挙げ、太平洋戦争や第1次石油危機などの歴史的事例や、ウクライナ危機という現在の重大問題を踏まえて、どのような地政学情勢や市場環境の下で、戦略物資の重要性が高まるのかを論ずる。そして世界の分断が進み、エネルギー安全保障が重視され、脱炭素化が待たないとな中、世界が戦略物資に熱い眼差しを向けるに至っている状況を解説し、本書のイントロダクション的な役割を果たしている。

第2章では、上述した、7つのエネルギー・資源について、資源量・生産量・消費量などの最新データで市場状況を概観し、本書のテーマである戦略物資の重要性や地政学の観点から特に重要なトピックを選択し論考を加えている。例えば、石油では「シェール革命」の意味、チョークポイントや中東の安定におけるアメリカの重要な役割などが取り上げられている。世界的に急速に拡大・普及が進む再生可能エネルギーについては、自然条件における供給可能性やコストの差異及び供給間歇性の課題や、再生可能エネルギーおよび関連産業における中国の巨大な存在感が論考の対象となっている。また、世界的に再び大きく脚光を浴びるようになった原子力についても、中国とロシアの存在感の大きさが議論されている。今後のエネルギー転換に不可欠となるクリティカルミネラルについては、将来の急激な需要増によって需給逼迫と価格高騰の懸念があることや、資源や精製・加工段階での特定供給源への偏在性の問題を、地政学の観点から取り上げている。クリーン燃料として大きな期待がかかる水素／アンモニアについて、世界の主要国がそれぞれの強みや特徴を活かして利用拡大や供給チェーンの確立に取組む状況を論じている。

第3章では、深刻化する世界の分断が戦略物資の重要性を大きく高めている現状を分析し、主要国の対応戦略を概観した上で、アメリカ、中国、ロシア、EU、中東、第3極（グローバルサウス）などの主要なアクターに目を向け、それぞれがどのような問題意識・危機意識・国家戦略の下で、戦略物資に関わる問題に取り組もうとしているか、を論じている。個別のアクターの対応戦略について論じる際には、第2章の場合と同様に、本書の問題意識である「戦略物資の未来地図」という観点で特に重要と考えた論点に絞って論考を加えている。

第4章では、戦略物資の未来に重要な影響を与える要因として脱炭素化の問題を取り上げ、脱炭素化がそれぞれの戦略物資の重要性にどのような影響を及ぼすのか、を論じている。石油・石炭・天然ガスなどの化石燃料需要の将来に与える影響とその対応策としての化石燃料の脱炭素化の重要性がクローズアップされている。また、再生可能エネルギー、原子力、水素／アンモニア、そしてクリティカルミネラルが脱炭素化の潮流の中、一層重要性を増すが、それが世界の分断や地政学にどのような影響を及ぼすかが考察されている。

第5章では、激変する国際情勢の下で日本が戦略物資に対してどのように取り組むべきかを論じている。また、日本が持ちうる戦略物資とは何かを考察し、それを活用した内外戦略の重要性を指摘している。その中で、日本の未来にとって改めて技術及びルールメイキングへの取組み強化が極めて重要であることを指摘している。本書が戦略物資の未来への世の中の関心を高めることの「入り口」となれば、筆者にとって望外の喜びである。

以上

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp